

ゼラブカからの招待状

堂垣園江



ゼラ
ブ
カ
か
ら
の
招
待
状
堂
垣
園
江

ゼラブカからの招待状^{しょうたいじょう}

一九九九年四月二五日 第一刷発行

著者——^{どうがきせのえ}堂垣園江

© Sonoe Dogaki 1999, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—十二—二十一 郵便番号 一一二—八〇〇—一

電話 出版部 (〇三) 五三九五—三五〇四

販売部 (〇三) 五三九五—三六二二

製作部 (〇三) 五三九五—三六一五

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-209649-8

（文1）

¥1800—

目次

風のほとりで

5

セラブカからの招待状

79

鳴かない犬

141

装帧
北川雅彦

ゼラブカからの招待状

風のほとりで

嫌な風が吹いた。

生臭いすえた水のおいがした。だれもが一樣に不安な視線を向ける。ヴィスワ川からの、いつもの初夏の風ではない。川面を撫で、公園を渡る甘い花々の香りがそこにはない。

汗？

握り締めていた旗に目をやり、そっと拳を開いてみる。どれだけ太陽が高くなっても、汗が滲む夏はポーランドにはない。それでもこんなに手が湿っているのはなぜだろう。旗を左手に持ち直し、汗ばんだ手をショートパンツの尻でぬぐう。いくら持ち替えても手はすぐに熱くなり、べったりした蜜状の汗をかく。

アンナは神経質なほど何度もパンツに手を擦り付け、心細い視線を走らせた。折り重なる人々の影、背中、幾千もの頭。そしてその頭上で揺らぐ大きな旗やプラカード。大学のキャンパスを出るまでは、彼は確かに側にいた。

ちよっとお、後ろでだれかが、不満の声を漏らした。振り向くと眼鏡をかけた若い女が、腹

立たしげにアンナの旗をメガホンで振り払っている。横に並んだニキビ面の男は舌打ちし、少し離れた列では互いに肩を組んで歌を唄い始めた。だれかがスローガンを大声で叫んだ。リーダーらしき学生は、調子の悪いマイクを使って、聞き取りにくい声で熱弁をふるっている。どこにもラシエックの姿はない。

さあ、これを持って。ラシエックはそう言って、この不安の根源である独立学生連盟の旗を握らせた。僕たちはね、この茶番劇を繰り返すばかげた劇団に、ブーイングを鳴らしてやらなきゃならないのさ。プロポーズの代りに彼は、熱い目をしてアンナに語った。

鼻先をふつとまた、あの嫌な風が吹いた。今度こそ、その風の方向へ振り返る。唾臭い息、甘く噎せるようなワキガのにおい。若者たちが放つエナジীরにおいを、薄い唇で冷笑している不吉な風。……違う、風じゃない。足元の敷石が鈍く震動している。遠くの轟きが、低い地鳴となってスタレ・ミヤスト広場に伝わってくる。

「散るな！ 肩を組め！ 集結しろ！」

突然、だれかが大声で叫んだ。と同時に頭上から水が痛いほど皮膚を打ち付けてきた。棒でつつかれた蟻のように人の群れが無秩序に蠢き、悲鳴が沸き上がる。

「水砲だ、安心しろ、奴らに俺たちが殺せるもんか！」

アンナはその声に思わず顔を上げようとした。ラシエックだ、今の声はラシエックだ。だが気持ちとは逆に咄嗟に旗を放してしまい、顔を伏せた。広場のあちこちから水砲が乱射され、

両手で顔をかばわないと目を開けていられない。痛い。水が頬に平手打ちを連打してくる。

アンナは屈み込み、手探りで旗を探した。あれを振れば、きっと彼が見付けてくれる。頭上からの放水と、逃げ惑う学生たちがあげる水飛沫^{なしぶき}に、呼吸すらできなくなる。手を踏まれ、鋭い痛みが指先に走る。

やめてよ、よしてよ、私はデモクラシーなんかに興味はないのよ。

水は服や靴に重力を与え、体の自由を鈍らせてゆく。髪や頬や鼻先から滴が垂れ、叫ぼうとして開けた口に容赦なく流れ込む。

「政府軍だ、ヤルゼルスキーの軍隊だ、戦車が俺たちを狙っている」

「落ち着け、みんな。脅しだ、間違えるな、あれはただの水砲だ」

学生たちはパニックになった。地面を這うアンナに足を取られ、折り重なるようにして倒れ込んでくる。心臓が強く圧迫された。だれかの胸で頭は泥水に押しつけられ、息をしようにも首の自由がきかない。苦しい。泥水が肺に入り、激しく噎せ返る。重い、痛い、そして暑い。気が遠くなる……。その瞬間、だれかがぎゅっと手を握った……。いや、そんなはずはない。しかし体が軽くなったような気がするのにはなぜだろう。

アンナ、アンナ、アンナ！ だれ？ だれなの？

「アンナ、しっかりしろ、アンナ」

強引に空気が肺に入れられた。アンナの肺はそれを拒んで激しく噎せる。だれかが頬を軽く

叩き、再び息を吹き込んで来る。

突然、近くで銃声が炸裂した。一瞬、体が強張り、感覚が消える。肺に流れ込んでくる水、息が詰まり、ひどく咳き込む。古新聞の分厚い束が投げ捨てられたような鈍い音を、耳元で聞いた。嫌な音だった。アンナは血腥い水を吐き出し、恐る恐る顔を向けた。

「逃げろ！ 殺られるぞ」

また、だれかが叫んだ。同時に水砲が止み、敷石を打ち砕くような暴力的な足音が、雪崩のように押し寄せて来た。

「さあ、君も」

だれかがアンナの腕をぐいと引っ張った。アンナはまだ足がついていけず、バランスを崩した。足元には、白目をむき、ぼかんと開けた口からダラダラ血を流している男が横たわっている。

「早く」

男はアンナを腕に抱き、強引にそこから引き剥がす。だれ？ ラシエック？ アンナは不安に足元の男と彼を交互に見やる。学生たちが足をもつれさせながら、我先にと教会や博物館目がけて走って行く。激しい銃声が光と音を破壊する。

はっと息を吸い、アンナは目を開けた。汗で巻き毛が湿り、額にまわり付いている。唇を

拭うと涎もないのに頬にすうっと線を引き、唾臭いにおいを放った。どうかしてる。一体何度同じ夢を見るのだろう。

枕元の電気スタンドの明りが灯った。反射的に目だけを明りの方へ向けると、横のベッドで寝ていた妹のバーバラが、半身を起してこちらを見ている。姉さん、と心配そうに妹は言った。

一緒に暮らし始めてからアンナは、こうした夢の呪縛から、何度も妹に助けられた。妹はいつも明りを点け、静かに「姉さん」と声をかける。その声は母親のように心配そうで温かく、うなされた理由も無理に聞こうとはしなかった。昔の彼女なら、執拗に詮索してきただろう。アンナは息を深く吐き、密かに何も聞かないバーバラに感謝していた。

アンナとバーバラが二人で暮らすのは、今が初めてではなかった。十年前、一九七八年から八〇年にかけての二年間、アンナはワルシャワのカレッジでレストランビジネスを学び、妹は家族の反対を押し切って姉のアパートから四年制高校に通っていた。姉妹は三つ違いだった。中学を卒業した時、隣町の三年制高校に行けと勧める家族に妹は、ワルシャワの四年制高校でないと大学進学は難しいの、と勝手な理由をつけて駄々をこねた。

故郷の村は、大小幾つもの湖が点在するポーランド北東部のマズリー地方にあり、小規模な自作農家からなる慎ましやかな農村地帯だった。丘陵地をぬってなだらかに続く牧草地、葎が茂る湖に深い森。日用品を買うにも隣町までバスに乗らなければならなかったし、そのバスも

冬になると雪のためひどく遅れた。もっとも、地方でいちばん大きいシニャラバイ湖周辺は例外で、夏になると避暑地としての賑わいを見せる。湖ぞいの古城を改装したホテルは十分な風格を保ち、そのホテルのレストランで、卒業後、アンナはウエイトレスとして働いていた。

あれは確かバーバラが十歳のクリスマスだったと思う。七面鳥が食べたいと、せっかく母が作った鶏料理を前に、妹は泣きわめいた。手を焼いた父は仕方なく、わざわざバスに乗って隣町まで買いに行ったが、イブに開いている店などなく、結局手ぶらで戻って来た。その日妹が、一晩中両親をてこずらせたのは言うまでもない。それ以来、彼女の家ではバーバラ用に七面鳥も飼っている。あんな美味でがさつな肉より、チキンのほうがずっとおいしいのに。とかく末っ子に甘い両親に、アンナは時々妬みの目を向けた。

「隣町の高校へ通えばいいのよ」

せっかくの一人暮らしを邪魔される羽目になったアンナは、自分たちもそうしたのだと、妹のわがままに腹を立てた。両親も一九七六年以降の物価高を危惧し、今度ばかりは、なかなか首を縦に振らなかった。ところが意外にも家業を継いだ新婚の兄が、妻の気苦労を察して妹の肩を持ち、結局彼らは渋々承諾してしまったのだ。「だって、あの町にはカフェがないもん」鼻歌を歌いながら荷物を運び込んできた少女のしたたかさを、アンナははっきり覚えていた。

「目が覚めちゃったんだったら、温かいスープでも飲む？」

妹はベッドから起き上がると椅子にかけていたカーデガンを羽織り、傷ついた娘を労る母親

のように、姉の側で返事を待った。あれから十年だもの、姉は心の中で呟いた。そして額の汗を拭いながらサイドボードの目覚し時計に目をやり、瞼を閉じた。午前三時を少し回ったところだった。

「いいのよ、ありがとう。でも、もう寝て。それに今スूपなんか飲んじやうと、目が冴えて本当に眠れなくなりそうだから」

彼女はそう言って枕元の明りを消した。眠れないだろうと思いつながらも、わざと眠いふりをした。妹に余計な心配をかけたくなかったし、それにもし、どんな夢を見ていたのかと聞かれたら、今度こそ大声で泣いてしまいそうだった。今までだれにも話したことのない辛い出来事。新聞やニュースも正確に事実には伝えていない。もちろん妹はラシエックを知っている。時々三人でお茶を飲んだし、何でも知りたがる十六歳のおませな少女が、二人の仲に興味を示さないはずがなかった。しかし妹にも、知らない出来事はある。一九八〇年のあの日、夏休みに入った妹は一足先に帰郷していた。

バーバラは羽織っていたカーデガンを肩から外し、そう？ と静かな声で応えた。ベッドに滑り込む木綿の音が、闇の中で微かに響いた。大人になっただけじゃない、お互いがお互いに對して優しくなったのだとアンナは思った。ポーランドを離れ、新たに暮らしを始めたカナダの地で、肉親と呼べる相手はどれだけ切望しようとも、自分たち以外だれもない。両親も兄弟夫婦も、新しい時代に失望したまま、荒廃したポーランドの中に留まった。百姓してりゃあ、

食うには困らないさ。それが二人の子供を持つ兄の口癖だった。

「姉さん」

バーバラは姉が眠っていないのを確かめるように、遠慮がちに声をかけた。アンナは軽く寝返りを打った。

「もう寝た？」

もう一度そつと姉を呼ぶその声は、何か言いたそうだった。

「何？ どうしたの？」

アンナはふと心配になって妹の方へ体を向け、薄く瞼を開けた。明りをつけていなくても目が闇に慣れてきたせい、枕から乗り出している妹の表情が分かる。アンナが振り向くと安心したのか妹は、枕の上で頬杖をつき、笑わない目で顔に被さる髪をじっと見つめた。

「どうしたのよ、あなたらしくない」今度はアンナが、母のように妹を慰めた。

二人はそれほど仲のいい姉妹ではなかったが、それでも国を捨ててからは相互に支え合い、それぞれの弱さを補い合った。ただ、妹が塞ぎ込んでいたりすると、姉は自分を責めずにはいられなくなる。カナダに来てから、二年になる。難民っていくらもらえるのかしら、と初めて得たベビーシッターの報酬の二十ドル札を指ではさんで溜息をついた妹の表情が、今だに忘れられないでいる。アンナは、難民にだけはなりたくなかった。だからウエイトレスをして貯めた貯金の全てをはたいて、人を介してまでビザを手に入れ、入国したのだ。